第３回 栗東市観光振興戦略会議　会議概要

■日時：令和７年 12 月４日（木）　午前 10 時 00 分～12 時 00 分

■場所：栗東市役所４階　傍聴者控室

■出席：《委員》

上田 雄三郎委員（会長）、鶴田 泰伸委員、濱田 康之委員、奥村 和也委員、
林 優里さん（杉田 健一委員の代理）

《オブザーバー・運営組織》

一般社団法人栗東市観光協会 山口 翔太郎事務局長

国土交通省 近畿運輸局 観光部 観光地域振興課 課長補佐 笹尾 和葵氏、

国土交通省 近畿運輸局 観光部 係長 嶋林 恒介氏

《委託事業者》

㈱しがぎん経済文化センター

《事務局》

環境経済部長、商工観光労政課長、商工観光労政課事務局担当

■欠席：《委員》

田中 義信委員（副会長）、山本 高之委員、清水 厚芳委員、杉田 健一委員、
高田 麻里委員

１．開会

（環境経済部長）

２．市民憲章唱和

３．あいさつ

（上田会長あいさつ　省略）

（事務局）

・本会議内容は原則公開。

・本日の傍聴者は０名。

４．報告事項

（１）第二期栗東市観光振興戦略（案）策定にかかるパブリックコメント実施結果と
対応について（報告資料１－１、１－２、追加資料１、２）

○事務局説明（省略）…資料に基づいて説明

【おもな意見交換】
特になし

5．協議事項

（1）第二期栗東市観光戦略　最終案について（協議資料1－1、1－2）
○事務局説明（省略）…資料に基づいて説明

【おもな意見交換】

委員　：5ページに令和6年の滋賀県観光入込客数が 5,033 万人とあって、こちらは延べ人数だ。1人の観光客が複数の観光地を訪問した場合、重複してカウントされた数になる。なので、12 ページの令和5年の観光入込客数の実績 103 万 8,043 人が延べ人数であるなら、県が算出している1人当たりの平均訪問件数の数値で割って、実人数に換算しないといけないのではないか。そうなると観光消費額も、27 ページの目標管理の数値も変わってくるのではないか。

事務局：12 ページ（1）で「栗東市内の観光地点を訪れた観光入込客をカウントした値で、例えば、1人の観光入込客が市内の複数の観光地点を訪れた場合は、複数回カウントしています」と記載しているとおり、延べ人数となっている。これは、第一期観光振興ビジョンを策定した際、延べ人数を基に観光消費額を算出しており、経年比較を可能にするため、今回も延べ人数を採用している。観光入込客数を含めたデータの出し方そのものにもいろいろと課題があると考えているが、すでに計画策定の最終段階に来ているので、実人数の出し方等も今後の課題として捉えているということでご理解願って、現状としてはこのまま進めさせていただきたい。

委員　：県の場合、訪問地点数、日帰りは1.3カ所くらい、宿泊は連泊する人で1.9カ所くらいだったので、それぞれの延べ人数を数値で割って観光消費額を出している。観光入込客数は延べ5,033万だが、実人数に換算すると4,600万人ぐらいに減る。栗東市の場合、103 万 8,043 人を 1.3 で割ると 79 万人くらいになり、観光消費額も 23 億円くらいになるので、結構な乖離があるのではないか。目標数値がだいぶアバウトになってしまう点は大丈夫だろうか。

事務局：現時点でパブリックコメントも終わっているため、この点を変更しようとするとかなり大きな修正になってしまう。実際、実人数の出し方にも曖昧な点もあ

るので、基本戦略でも触れているが、今後、エビデンス部分の確認をしっかり取りながら進めていきたい。今すぐどうこうできることでないと考えているので、現在の形で計画を進めながら、問題意識を持って継続して取り組んでいきたい。

委員　：確かに前回との比較で考えると、同じ計算式の方がやりやすいことは了解した。

事務局：今後、デジタル化なども含めて、数値目標そのものも考えていかないといけないかもしれないので、継続して検討していきたい。

委員　：17 ページ「栗東市にとっての観光資源（５分類)」④レジャー・アクティビティ資源について、観察の森から栗東ホースパークまでを「交流・憩い・レクリエーション拠点」としてまとめているが、一方で 23 ページ「観光資源の利活用」では山関連の公共施設を「マスタープランにおいて交流・憩い・レクリエーション拠点として位置付けている」とあるので、結局どのエリアを拠点としているのかがよくわからない。山と文化ゾーンで印象が一致しなかった。この点は説明があると良い。また、滞在型を推進するのか数を増やすのかという点で、滞在型推進の方針についての記述があれば良いと思った。

事務局：17 ページの分類は、ご指摘のとおり説明がやや不十分な印象になっているが、ここで表現しているのはあくまで分類であって、金勝山については「自然資源」で既に記載しているため、「レジャー・アクティビティ資源」では漏れているように見えてしまっている。また、金勝山も都市計画上はレクリエーション拠点と位置づけている。そのため、23 ページでは利活用を進めると記載されている。分類と利活用の方向性とで表記しているということでご理解いただければありがたい。滞在型については記載がやや十分ではないかもしれないが、方向性としては、重点戦略の観光資源の磨き上げの部分や、これから具体的に実行計画を作りながら進めていく中で、併せて推進していく方針だ。

委員　：これでいくしかないと思っているが、今回の観光振興戦略は元々、振興ビジョンとして作っていたものを急遽戦略に変えたため、付け焼刃の印象が否めない。５年間の戦略だが、早急に根本から見直すべきではないかと思っている。先ほど委員から指摘があった数字について、私が従来言っている観光じゃない数字がたくさん入っている点もそうだ。「道の駅」では買物に来た方も観光と捉えているので、本当の数字ではないと思っている。できれば早めにマイナーチェンジをしていただきたい。

事務局：この戦略は未完成のように見えるかもしれないが、これから実行計画を作っていきたいと考えている。毎年度、具体的にどのようなことを進めていくのかを記載することで、その部分が戦略として見えてくるのではないか。協議事項の２点目で、現在進めている具体的な取り組み案について協議いただくが、こうした内容を実行計画の形で取りまとめながら、それぞれ問題意識を持ってこの５年間を着実に進めていきたい。委員の皆さんと一緒に実行計画を作っていきたいと考えている。

委員　：９ページのアンケート結果で、訪問場所や訪問動機のデータはあるが、「目的」について調査してもいいのではないか。何のために栗東に来たのか、何をするのかのデータも取れば、具体的な戦略や今後の動きも考えていけるのではないか。

事務局：今年度、観光庁に派遣いただいた専門家から、観光協会さんと一緒にいろいろ助言をもらっていて、より効果的なアンケート方法についてもアドバイスをいただいている。その中で来訪目的に関することを聞くのも一つの方法かと思う。今後、エビデンスをどのようにしていくかという点はこれから検討していきたい。また、この戦略会議でも報告をさせていただきたい。

会長　：では追加でご意見なければ、第二期東市観光振興戦略の最終案については現在記載されている内容で進めてまいりたい。ただ、戦略は一つの姿であり、この戦略をいかに使っていくかということがポイントになろうかと思う。逆に言えば、うまく使えれば戦略が生きてくるということにもなる。また、戦略上おかしいような部分があれば途中でいろいろな動議を出していただくこともあろうかと思う。次の協議事項である具体的な取り組みについても、ぜひ活発なご意見をいただきたい。

（２）第二期栗東市観光振興戦略に基づく具体的取り組み（案）について（協議資料２）
○事務局説明（省略）…資料に基づいて説明

【主な意見交換】

委員　：昔から住んでいる住民にとって、「馬のまち栗東」とはまだ胸を張って言えない。市のキャッチフレーズになっているものの、観光という切り口で「栗東って何ですか」と聞かれたとき、誰もが「馬のまちですよ」と言える状況を作らないといけない。滋賀デスティネーション・キャンペーン（以下滋賀 DC）に関し

ては、一つのきっかけになると思うので、その前に「馬のまち」に繋がるストーリーをしっかり作り上げておいたほうが、市外からの来訪者に対して一般市民の方も「馬のまちだ」と言えるのではないか。何らかのことを作り上げた上で、協議資料２の取組内容２や３を進めていかないと、また「何で？」という声が上がって、止まってしまう可能性が出てくると思う。

もう一点は、VR、XR に関して、もちろん馬のまちを PR する絶好の材料として使えるかなと思うが、まだまだ栗東について知られていないことがある。そういうのはVRを使えばどこでも簡単にPRできるとなってくると、栗東の魅力発見の中で「イチオシは馬なのですよ」というぐらいの形で進めたほうがより実効性があるのではないか。VR や XR で体験してもらって、実際に山に行きましょうという流れにも使えると思うので、そういう点からも、取組内容２に絞り込みすぎかなと感じた。それは取組内容１にも関わってくるかと思う。

事務局：今の「馬のまち」のストーリーにも関連するが、実は滋賀 DC に向けて来年６月には素材集をエントリーしなければならず、非常に時間がないというのが率直なところだ。約半年しかない中で、12 月の市議会定例会で補正予算をお願いしていて、１月には滋賀DCに向けた準備に着手して進めていきたいと考えている。そうした中で、今の「なぜ馬なのだ」という点については、基本戦略的な部分を事業者の皆さんと一緒に作っていきたいと考えているので、内容が進んだら皆さんにも提示できればと考えている。

もう一点の VR、XR については、非常に可能性があるものだと考えている。栗東市には大きな工場などがあるものの、何が作られているのかなかなか見ることができないので、そうした産業観光などでも使えるのではないか。何より、第二期観光振興戦略では「シビックプライド」にも着目しているので、市民の皆さんに、いかにこの栗東の良さを感じていただけるかという点でも最大限に活用していくべきだと思う。今回はたまたま「馬」を紹介しているが、他にも山や東海道などのテーマでも活用していきたいと考えている。

委員　：今、県でも滋賀 DC 推進室を立ち上げて動いているところで、栗東市さんも滋賀 DC にしっかり取り組んでいただいて心強いと感じる。取組内容１にある東海道や宿場・立場による観光コンテンツについて、ぜひ普段は見られないものや、今まで見せたことがないもの、一般の方が体験できない神事や祭、イベントなどが、滋賀DCの期間中は特別な体験ができるコンテンツを作っていただきたい。

「馬のまち」について、滋賀 DC は 10 月～12 月の期間なので、ちょうど競馬の G1 シリーズと重なる。リアルな競馬ファンだけでなく、今、スマホゲームや

ゲームセンターなど競馬ゲームも大変賑わっている。ゲームを通して競馬に興味を持っている人は競馬のファン層とはまた異なると思うので、いろいろなコンテンツも活かしていただき、一体となった「馬のまち」としての仕掛けをやっていただければありがたい。

事務局：今のご意見は、いろいろな企画を検討する際に参考にさせていただきたい。特に東海道は草津市、湖南市とともに取り組みを進める中で、今のご助言についても情報提供しながら一緒にやっていきたい。また、「ウマ娘」とのコラボ企画もシティプロモーション課で進めようという動きがある。相手方があることなのでまだはっきり言えないが、こういったこともうまく活用できたらと思っている。市長も大の競馬ファンなので、できる限りＪＲＡと連携して進めていければと考えている。

委員　：取組内容４の特産品開発に関連して、私は栗東市のキャラクター「くりちゃん」のキーホルダーを配り歩いているが、個人的にはもうちょっとバリエーションがほしい。

会長　：取組内容３の「馬糞のたい肥を使った農産物から特産品を開発」は、農林課と連携しているのか。

事務局：農林課ではまだ具体的にはなっておらず、これからだ。

委員　：取組内容５の「レジャー・アクティビティ資源の琵琶湖カントリー倶楽部周辺の土地利用を進める」という部分について、ここも拠点として検討しているということを今回初めて知った。これまでこのエリアの活用について、どんな意見が出ていたのかを知りたい。また、あのエリアの印象として、観察の森や歴史民俗博物館、図書館などの文化ゾーンとしての既存エリアがあって、ホースパークとの動線もいい環境なので、カントリー倶楽部周辺の新しいことよりも今ある文化ゾーンをうまく観光資源にする戦略のほうが魅力的ではないか。その辺りのお考えも聞きたい。

事務局：取組内容５の利活用については、都市計画法の 34 条の２号で、調整区域であっても観光の施設に関しては一定認めていこうという制度があり、それを有効活用して、今、委員がおっしゃったような観光資源を引き立てるような土地利用を図ることができるようになっていくと思う。今回はたまたま琵琶湖カントリーさんが一番手として出てきているが、戦略の中の観光資源の利活用で申し上

げたとおり、五つの資源それぞれについて利活用を進められる仕組みを今、作ったところになる。
今後、実際に土地の所有者の方からこのような利活用をしたいという申し入れがあれば、この制度を使って、ルール化して進めていけると考えている。まず仕組みが先にできたということだ。例えば走井で行われている活動を補完するために観光施設を作ろうというような相談が出てきたら、この制度を使って活用できるかもしれない。まずはこの戦略の中にその仕組みを取り入れたとご理解いただけたらと思う。

会長　：先ほど「馬のまち」があまり浸透していないという話があったが、「馬のまち」はいつ頃から言われているのか。

事務局：JR 手原駅に「馬のまち栗東」という看板を出したのが最初だったように思う。実際には、JRA の栗東トレーニングセンターが栗東に来てからもう 50 年以上経っていて、馬が栗東の地域特性として全国的な知名度にも寄与しているのは、やはり JRA さんによる部分が大きい。一方で、競馬はギャンブルという特性もあるので、これがプラスのイメージなのがマイナスのイメージなのか逡巡している中で、それほど強く打ち出してこられなかったという現状がある。現在の市長は強く押していこうということを掲げており、市長就任からの 3 年でようやく「馬のまち栗東」を強くアピールし始めたところだ。

会長　：この言葉についてはおそらくいろいろ議論があったのではないかと思う。「馬のまち」というと馬を生産して、特産品は馬刺しといった印象を受けやすいと思うが、例えば「馬と遊ぶまち」や「馬と触れ合うまち」ということを言いたいのではないか。例えば競馬に特化するなら「競馬のまち栗東」でもいいし、ウィンズを呼んで来たらいいのかもしれないが、「馬のまち」だと何かふわっとしている印象だ。「馬のまち」ならマウンテンバイクも馬っぽいデザインにするとか、騎手の格好をするような服を売るとか、いろいろな展開ができると思うが、それがあまりない。「馬のまち」という言葉によって逆に発展がしにくいのかなと思うが、過去にそんな議論があったのではないか。

事務局：JRA の栗東トレセンは非常に閉鎖された空間になっていて、基本的に馬を見ることができない。馬のまちと言っているのに見ることもできないじゃないかというのが、今まで一番言われてきたことで、「馬のまち」が浸透しにくかった一因かと思う。そうした中で、ホースパークができるとようやく本当に馬に触れ合う機会が生まれてくる。実際には馬関連産業という言葉で言われるように、

地域には馬に携わる方が非常にたくさんいらっしゃるので、馬への愛着や誇りを抱く方はとても多いと感じている。

会長　：やり方次第だと思う。私自身も「馬のまち」という言葉に対して「どうしたいのか、遊びたいのか、触れ合いたいのか」というような違和感があったので、いろいろな具体的な例があるとわかりやすくなるのではないかと思った次第だ。

事務局：先ほどの委員のご指摘も、会長のご指摘もそうだが、やはり「馬のまち」というのがまだ浸透していないという現状を理解しながら、どうやって PR していくかを検討し、具体的に進めていきたい。

（3）（一社）栗東市観光協会提案の観光地域づくり法人（DMO）について（協議資料３）

○栗東観光協会および国土交通省近畿運輸局観光部観光地域振興課より説明…資料に基づいて説明

委員　：今年 10 月に登録・更新の要件が変更になった。DMO の方などからは、要件が厳しくなったので国としては、DMO の数を減らしていく方向性なのかという意見を聞いている。その辺りも含めて、今から新しく候補 DMO になり、登録 DMO になるハードルはどのような感じなのか。また、個人的には栗東市観光協会さんが DMO を目指されるのを応援したいと思っているが、草津・守山・野洲・栗東の 4 市で構成する湖南地域観光振興協議会さんがエリアで DMO になるのもいいのではないか。単独なのか、広域エリアなのかについて今お考えがあるなら教えていただきたい。

事務局：この協議事項については、皆さんからご意見をいただきたいという趣旨で、今すぐ方向を決定するようなことではないので、委員のお話のように、いろいろなご意見いただきたいと思っている。今日は観光協会の会長がご不在なので、事務局の方に回答をお願いしたい。

観光協会：１点目については近畿運輸局さんにお願いしたい。

近畿運輸局：おっしゃるとおり、今年 10 月に DMO のガイドラインが改正になり、登録・更新の要件はかなり厳しくなっている。現在登録いただいている DMO の皆さまからも、この先どうやってデータ収集などをしていこうかという話を聞いているところだ。今の登録 DMO を減らそうとしているというより、登録

DMO 全体の底上げを図ろうとしているような形だと思う。その上で、確かにハードルは高いが、そのハードルを越えてでも栗東市の観光まちづくりのために DMO に登録したほうがいいというお考えであれば、皆さんに協力いただいて、巻き込んで進めていくべきかなと思っている。必ずしも DMO にならないといけないというわけではなく、DMO にならずとも一丸となって進んでいけるというのであれば、それはそれでいいと思うが、その辺りも踏まえて観光協会さんのお考えをいただけたらと思う。

観光協会：２点目について、観光協会では広域ではなく単独でのあり方を第一義に考えていただきたいというところだ。と言うのも「わが町のことはわが町で」ということで観光協会が組織されたという点と、今後、DMO として観光協会が機能するということだ。４市連携は一旦、議論の俎上に上げていただいた中で、自分のまちをどうするのかというところを、機運醸成など議論を重ねていく中で進めていただきたいと考えている。
お隣、京都の美山がある南丹市のように、都道府県 DMO、地域連携 DMO、単独市町村 DMO という３層のレイヤーに加えて、広域連携の関西観光連盟も入って４層になっているところもあるので、そのような事例も参考にしつつ、栗東市として、また市の観光協会として取り得る手段を狭めていって、どのような方法がいいか可能性を探っていきたい。

委員　：この協議資料３だが、この戦略会議の会長宛てに委員としての観光協会の会長さんと、奥こんぜ農泊推進協議会の会長さんが連名で提出されているが、文書を見ると「私たち一般社団法人栗東市観光協会は」となっていて、誰がどこに向けたものなのかよくわからない。なぜ奥こんぜの農泊推進協議会の会長がこの文章に入ってきているのかも含めて、ご説明いただきたい。

観光協会：委員の連名になっている点については、奥こんぜ農泊推進協議会に栗東市観光協会が所属しているということ、また、奥こんぜ農泊推進協議会の会長には NPO 法人縁活（えんかつ）として協議会の構成員をしていただいていて、なおかつ観光協会の理事も務めていただいていることがある。前回の理事会において、この意見書を観光協会として市の観光振興戦略会議に提出する旨を諮ったところ、奥こんぜ農泊推進協議会会長として連名で出したいということで、今回この二名での提出となった次第だ。

委員　：あくまでも栗東市観光協会さんが単独 DMO を推進したいのでご意見いただけますかという意見書だと思うが、奥こんぜ農泊推進協議会さんも DMO の中に

入るという意味なのか。委員として提出するのではなく、観光協会としてDMO化を目指したいので委員さんの意見をくださいというのであれば、観光協会さんが単独で提出するべきだと思う。農泊推進協議会さんがなぜ連名になっているのか。農泊推進協議会さんが観光協会さんの DMO 化を後ろ盾しますということも含めて連名の提出になっているのか。文書が「栗観協第 77 号」となっているので、これは観光協会さんの公式文書だろう。であれば、この戦略会議の委員だからということではないと思う。
私は、この会議で議論できないと思う。戦略会議の構成委員を見ると、ほぼ観光協会の方々と、あとはビジターズビューローと商工会。清水商店さんも商工会の代表として参加しているものの、観光協会にも入っている。観光協会さんの内部では、単独 DMO を目指すというコンセンサスができた上で、この戦略会議に提出された文章なのか。先ほど近畿運輸局さんから説明があったように、自主財源の問題がある。当初は補助金で賄えると思うが、実際のところ自主財源がどのような金額なのか確定した上で DMO を目指したいという資料がないと議論できないと思うし、議論で意見を言える立場の人間はここには少ないのではないか。そうなると、多数決の原理で言えばこれは通ってしまう可能性も出てくる。こういったことも含めて、誰が何のためにこの文書を提出したのかを整理しないと、議論の土台にならないのではないか。

会長　：この会議で、結論を出すという話ではない。今回はあくまで、今後 DMO について考えますという方針が、今回の戦略の中で出ていて、それに対して委員として皆さんどう思いますかというヒアリングになると思う。つまり DMO 化すること自体は前向きな話であると思うが、その DMO の形態は書面にあるように栗東観光協会を母体とするのか、新たに何か作っていくのか、先ほどご意見いただいたように広域化を検討するのか、これはいろいろなことが必要になってくる。もし DMO 登録を本格的に申請することになったら、DMO 設立準備委員会のようなものを別途開催して、その中で今のような議論をしていくことになると思う。そういう会議をしなきゃいけないよねというような結論はこの戦略会議で出てくるかもしれないが、まずは DMO 化するということに関して、皆さん方の委員としての立場でどのように考えるかご意見を伺いたいというのが、この協議事項３の内容になると思う。そういう内容でご理解をいただけるだろうか。

事務局：今、会長がおっしゃったとおりで、今回、この場で多数決により物事を決定するものではなく、皆さんから DMO 化を検討するのであればこういう視点が必要だよというご意見をいただけたらと考えている。次の展開としては、今、会

長から DMO に向けた委員会を設立する可能性についてご意見があったが、これから正式に DMO に向けてどう考えていくかのキックオフだと捉えているので、今すぐにどうこうではなく、どのような点を整理した上で進めるべきかということも含めてご意見いただけたらと思う。

会長　：先ほどの委員のご意見では、前向きな動きだから応援するけど、いろいろな準備もやらなきゃいけないし、広域という考え方もあるでしょうということだったと思う。

委員　：やはり単独は厳しいのではないかと思う。もちろん広域だから通るというわけではない。例えば、組織的には常駐職員が 3 人必要といった条件があり、それを満たしてやっていけるか。手を挙げるのはいいが、その後登録されるかどうかは結構高いハードルがあるのではないか。

委員　：私も同様に、自主財源ということも含めて、単独ではおそらく難しいだろうという印象だ。先日、草津商工会議所さん、守山商工会議所さん、野洲商工会さん、我々栗東商工会のそれぞれ正副会長で TCC の見学に行ってきた。市長もお越しになりお話いただいた中で、各会長、会頭から出た話は、いかに 4 市が連携を組んでいくかによってまちづくりの発展性は変わってくるということだった。特に、ふるさと納税の法人版があるので、ホースパークについて、JRA さんからおそらく 14 億円ぐらい寄付があるであろうという点を考えると、法人税を納めるぐらいだったら、4 市がそれぞれ協力した中で税金を納めても会社にとってデメリットは何もない。もちろん地方税としては減少してしまうが、栗東が守山のことに税金を投入することもできる。つまり、4 市が組むことによって、よりスケールメリットが出るということを実感した一日だった。
JR の乗降客についても、草津や守山で降りた人が大野神社や金勝方面に行くという事例はすごく多い。栗東駅も含めると 3 駅をいかに共通化するかも、こういう母体があればこそできる話だろう。4 市の協議会もあるので、ぜひそこで議論をしてもらえたらいいのではないか。観光協会さんが何を目指してこの文章を会長名で提出されたのか、ちょっとわからなくなっているというのが正直なところだ。この戦略会議の中で、DMO はどういうもので、どうあるべきかを、先ほどの近畿運輸局の説明も踏まえて議論した上で、単独の案、広域の案などいろいろ議論していくのであればいいのかなと思う。

会長　：今回出たご意見でも、DMO の形態はいろいろあって、単独がいいのか、広域がいいのかも含めて議論して、検討内容を充実させることが重要だということ

かと思う。まず栗東市の関係者を集めていただいて、その中でいろいろ議論することを始めないと何事も進まないのではないか。個人的には、単独でやってみたらどうかなと思っていて、その際には観光協会と商工会は絶対一緒に入ってほしい。オール栗東でやるのが一番重要だろうと思うが、商工会側の意向や他の組織もあるので、幅広くいろんな方の意見が入れられるような会議をぜひ早急に進めていただければと思う。

委員　：今の会長のご意見を受けて付け加えさせていただけると、単独になろうが、広域になろうが、商工会や商工会議所は何らかの形で関わるべきだとは思っている。ただ、正直その議論が全くされていない。うちの会長にもこの DMO に関する話は一切入っていないので、私としてはこういう意見を言わざるをえない状況だ。まだ時期早尚というのは、やはり観光協会さんから何らかの提案があって議論できる場を設けた上で、商工会としても関わるべきかどうかを議論していかないと私も答えが言えないなと思う。

会長　：では、前に進めていくということと、最後に、近畿運輸局の方が一番ご存知かと思うが、結局は自治体がどこまで腹くくるかということはあるのではないか。

近畿運輸局：DMO を始めるにあたって、いきなり自分たちで収益事業ができて、お金も稼げるということはまずない。やはりある程度公的な予算を入れて運営しながら、自主財源、安定財源をどう確保していくかを探っていく側面があると思う。おっしゃるとおり、DMO を作るにあたっては、地域の皆さんをどれだけ多く巻き込むかということが非常に重要になる。DMO は観光地域づくりの司令塔となる法人なので、皆さんの合意を得て成り立っている法人でなければ、そもそも司令塔となり得るのかということになってしまう。設立の段階からできるだけ多くの方を巻き込んで、皆さんの合意の上で設立することがその先の運営にも繋がると思うので、設立する/しないの判断も含めて、皆さんの幅広い議論の中で検討いただければと思う。

会長　：ありがとうございます。

（４）今後のスケジュール（案）について（協議資料４）

○事務局説明（省略）…資料に基づいて説明

【おもな意見交換】

とくになし

６．その他

・第４回栗東市観光振興戦略会議の日程について

〇事務局から日程提案があり、令和８年２月 17 日（火）15 時で決定。

７．閉会

（環境経済部長によるあいさつ　省略）

以上